

肉用牛広域後代検定推進事業

鈴木 肇¹・木村安之・津田和之・相澤博美

Individual Performance Test of Sire in Japanese Black Cattle

Hajime SUZUKI, Yasuyuki KIMURA, Kazuyuki TSUDA and Hiromi AIZAWA

要 約

黒毛和種雄子牛10頭について、(社)全国和牛登録協会が定める産肉能力検定直接法に基づき飼育し検定した。

検定の結果は、旧検定法の3頭は1日平均増体量の平均が1.44kg、発育判定3以上を示したもののは2頭、新検定法の7頭は1日平均増体量の平均が1.21kg、発育判定3以上を示したもののは5頭であった。

10頭のうち2頭を選抜し、後代検定を実施する。

キーワード：和牛、種雄牛、直接検定、改良

緒 言

肉用牛の改良を図るために、優れた種雄牛を選抜することを目的に、肉用牛広域後代検定推進事業により選定された基礎雌牛から、指定交配により生産された雄子牛10頭を選抜し、(社)全国和牛登録協会が定める産肉能力検定法(直接法新旧)に基づき飼育し検定した。

材料および方法

1. 供試牛

茨城県肉用牛広域後代検定推進事業で選定した基礎雌牛から、指定交配により生産された生後日齢202~256日の雄子牛10頭。

2. 検定期間

112日間。検定開始前20日間を予備飼育に充てた。

3. 飼養管理

牛舎は10.7m²に11.2m²の運動場を併設した单房式で、給水はウォーターカップ、給塩は圓形塩を用いて自由摂取させた。敷料はオガクズを使用し、糞の搬出は毎日実施した。

また、削蹄は適宜実施した。飼料は旧検定

法では、産肉能力検定(直接法)用配合飼料に細切した稻わらを10%混合し、朝夕1時間づつ制限給与、新検定法では、新産肉能力検定(直接法)用配合飼料を体重比1.6%不斷給与した。また、両法ともチモシー主体の乾草(酪農1級品)を草架により自由採食させた。

4. 調査事項

体重測定は2週間毎、体各部の測定は4週間毎に実施し、開始時と終了時に体型評価を行った。飼料摂取量は毎日調査し、摂取養分量は「日本標準飼料成分表」1995年版により算出した。

結果および考察

検定を終了した10頭(旧法3頭、新法7頭)の成績は、表-1のとおりである。

1. 1日平均増体量の平均は旧法が1.44kg、新法が1.21kgであった。選抜のひとつの目安としている1.10kg以上は旧法が3頭、新法で6頭であった。
2. (社)全国和牛登録協会が定めた体高値による発育判定は、旧法で3が2頭、2が1頭、新法で3が5頭、2が2頭であった。

1 現茨城県県北地方総合事務所

3. 検定した10頭のうち、舞花桜、神北正の2頭を選抜し、後代検定を実施することにした。
また、北国闘牛7を保留とし、交雑牛を用いて産肉データーを集めることとした。